

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 —2014年(平成26年)—

永野喬子 三浦美穂¹⁾ 吉野修司¹⁾ 元明秀成¹⁾ 竹井正行²⁾

Summary of the 2014 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Kyoko NAGANO, Miho MIURA, Shuji YOSHINO, Hidenari GAMMYO, Masayuki TAKEI

要旨

2014年に県内では全数把握対象84疾患中、25疾患が報告された。疾患別では結核(248例)、腸管出血性大腸菌感染症(31例)、つつが虫病(27例)の報告が多かった。全国的に報告数の増加がみられたA型肝炎は県内でも同様に増加し、全数把握対象疾患になった2003年以降最も報告数が多かった。また、重症熱性血小板減少症候群は県内で11例報告があり、愛媛県や高知県と並び全国で最も報告数の多い都道府県の一つであった。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年と同程度、例年の約0.9倍、全国の約1.6倍であった。眼科及び基幹定点報告疾患の報告総数は、前年の約0.8倍、例年と同程度、全国の約3.8倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年の約1.1倍、例年の約0.9倍、全国の約0.7倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年の約0.7倍、例年の約0.6倍、全国の約0.9倍であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1994年(平成6年)から感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における2014年(平成26年)の患者発生状況をまとめたので報告する。

2 調査期間

全数把握対象疾患については2014年1月1日から12月31日まで、定点把握対象疾患については2014年1週から52週まで、インフルエンザについては2014/2015年シーズンの2014年41週から2015年14週までをそれぞれ調査期間とし、いずれの疾患も診断日をもとに集計した。

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で定められた113疾患を調査対象とした。

指定届出医療機関(以下「定点」という。)は、感染症発生動向調査事業実施要綱¹⁾に基づき選定した(表1)。

表1 保健所別指定届出医療機関(定点)数

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	5	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	59	36	6	7	13

企画管理課 ¹⁾微生物部 ²⁾元 衛生環境研究所

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった。

2) 二類感染症

結核 248 例が報告された。

a) 結核 Tuberculosis

報告数は 248 例で、前年(242 例)と同程度であった。このうち、肺結核が 123 例、その他の結核(結核性胸膜炎、腸結核、結核性リンパ節炎等)が 30 例、肺結核及びその他の結核が 5 例、疑似症患者が 19 例並びに無症状病原体保有者が 71 例であった。宮崎市(132 例)、都城(29 例)、高鍋(25 例)保健所からの報告が多く、性別では男性が 119 例、女性が 129 例であった。年齢別では 70 歳以上が 137 例と全体の約 6 割を占めており、高齢者の割合が高かった。

3) 三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症 31 例が報告された。

a) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic Escherichia coli infection

報告数は 31 例で、前年(94 例)の約 0.3 倍と少なかった。患者が 16 例(うち HUS 発症:2 例(O111, O157 各 1 例ずつ))、無症状病原体保有者が 15 例であった。O 血清型別では、O157 が 6 例、O26 が 5 例、O121 が 4 例と多かった(表 2)。宮崎市(13 例)、都城(6 例)、小林(5 例)、高鍋(2 例)、延岡・日南・高千穂・日向・中央(各 1 例)保健所からの報告で、年齢別では 1 歳から 4 歳が 8 例と多かった。

表 2 O 血清型別報告数

O 血清型	報告数
O157	6
O26	5
O121	4
O91,O115	各3
O55,O111	各2
O1,O6,O103,O128	各1
不明	2
計	31

発生月別では 6 月から 9 月が 15 例と全体の約半数を占めた。

4) 四類感染症

E 型肝炎 4 例、A 型肝炎 15 例、重症熱性血小板減少症候群(SFTS)11 例、つつが虫病 27 例、日本紅斑熱 7 例、ボツリヌス症 1 例及びレジオネラ症 13 例が報告された。

a) E 型肝炎 Hepatitis E

報告数は 4 例で、いずれも宮崎市保健所からの報告であった。年齢別では 50 歳代 1 例、70 歳代 2 例、80 歳代 1 例で、主な症状として全身倦怠感、食欲不振、黄疸、肝機能異常等がみられた。

b) A 型肝炎 Hepatitis A

報告数は 15 例で、届出開始となった 2003 年以降最も多かった。宮崎市(8 例)、日南(3 例)、小林(2 例)、延岡及び日向(各 1 例)保健所からの報告であった。年齢別では 20 歳代 4 例、40 歳代 1 例、50 歳代 3 例、60 歳代 7 例であった。主な症状として全身倦怠感、発熱、食欲不振、黄疸、肝機能異常等がみられた。遺伝子型は IA 型が 7 例、不明が 8 例であった。推定感染経路は経口感染が 9 例、その他が 6 例であった。

c) 重症熱性血小板減少症候群

SFTS(severe fever with thrombocytopenia syndrome)

報告数は 11 例で、宮崎市(5 例)、延岡及び日南(各 3 例)保健所からの報告であった。性別では男性 3 例、女性 8 例、年齢別では 70 歳以上が全体の約 7 割を占めた。主な症状として発熱、神経症状、全身倦怠感、血小板・白血球減少等がみられた。患者の発症時期は、1 月から 8 月であった。

d) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は 27 例で前年(23 例)と同程度だった。患者発生時期は例年どおり冬季で、12 月(17 例)の報告が全体の約 6 割を占めた。小林(10 例)保健所からの報告が多く、性別では男性 13 例、女性 14 例、年齢別では 70 歳以上が約半数を占めた。主な症状として頭痛、発熱、発疹、刺し口、リンパ節腫脹等がみられた。

e) 日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は7例で、発生時期は5月から8月及び12月であった。日南(4例)、宮崎市(2例)及び日向(1例)保健所からの報告であった。性別では男性3例、女性4例、年齢別では30歳代・50歳代・60歳代が各1例ずつで、70歳以上が4例であった。主な症状として発熱、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常等がみられた。

f) ボツリヌス症 Botulism

報告数は1例で、宮崎市保健所からの報告であった。10歳代で、主な症状として弛緩性麻痺、複視、嚥下困難、口渇、便秘、筋力低下等がみられた。感染源は不明で、原因病原体は *Clostridium butyricum*(E型ボツリヌス毒素産生)であった。

g) レジオネラ症 Legionellosis

報告数は13例で、前年(8例)と比較して多かった。病型は肺炎型12例、ポンティアック熱型1例であった。宮崎市(7例)、都城(2例)保健所からの報告が多かった。性別では男性11例、女性2例、年齢別では40歳代1例、50歳代2例、60歳代4例、70歳代2例、80歳代4例であった。主な症状として発熱、肺炎、呼吸困難、咳嗽等がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢5例、ウイルス性肝炎2例、カルバペネム耐性腸内細菌感染症3例、急性脳炎5例、クロイツフェルト・ヤコブ病3例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症1例、後天性免疫不全症候群13例、ジアルジア症1例、侵襲性インフルエンザ菌感染症1例、侵襲性肺炎球菌感染症12例、水痘(入院例)1例、梅毒12例、播種性クリプトコックス症1例、破傷風1例、風しん3例及び麻しん4例が報告された。

a) アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告数は5例で、腸管アメーバ症が4例、腸管及び腸管外アメーバ症が1例であった。都城(2例)、宮崎市・日南・小林(各1例)保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢別では、40歳代4例、70歳代1例であった。主な症状として下痢、粘血便、肝膿瘍等がみられた。

b) ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告数は2例で、いずれの患者も原因病原体は

B型肝炎ウイルスで、宮崎市保健所からの報告であった。性別は男性2例で、年齢別では20歳代と30歳代各1例ずつであった。主な症状として全身倦怠感、褐色尿、黄疸等がみられた。

c) カルバペネム耐性腸内細菌感染症

Carbapenem-Resistant Enterobacteriaceae

2014年9月から届出対象となった疾患で、報告数は3例であった。原因病原体は *Serratia marcescens*, *Enterobacter cloacae*, *Raoultella ornithinolytica* 各1例ずつで、いずれも宮崎市保健所からの報告であった。年齢別では0歳1例、60歳代2例で、症状は菌血症、胆嚢炎、尿路感染症各1例ずつであった。

d) 急性脳炎 Acute encephalitis

報告数は5例で、原因病原体はインフルエンザウイルスA型2例、インフルエンザウイルスB型1例、不明2例であった。宮崎市(4例)及び延岡(1例)保健所からの報告であった。年齢別では1~4歳3例、30歳代1例、80歳代1例であった。主な症状として発熱、痙攣、意識障害等がみられた。

e) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は3例で、古典型クロイツフェルト・ヤコブ病2例、その他1例であった。都城(2例)及び宮崎市(1例)保健所からの報告で、性別では男性1例、女性2例であった。年齢別では50歳代1例、60歳代2例であった。主な症状として進行性認知症、ミオクロヌス、錐体路症状等がみられた。

f) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infections

報告数は1例で、血清群はG群であった。高鍋保健所からの報告で、年齢別では70歳代であった。主な症状としてショック、中枢神経症状等がみられた。

g) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は13例で、AIDSが5例(指標疾患:ニューモシスティス肺炎3例、HIV脳症1例、原発性脳リンパ腫1例)、無症候性キャリアが7例、その他(急性HIV感染症)が1例であった。いずれも

宮崎市保健所からの報告で、男性であった。年齢別では 20 歳未満 1 例、20 歳代 4 例、30 歳代 3 例、40 歳代 3 例、50 歳代 2 例で、推定感染経路は同性間性的接触 8 例、異性間性的接触 3 例、静注薬物使用 1 例、不明 3 例であった(同一人から複数経路 1 人)。

h) ジアルジア症 Giardiasis

報告数は 1 例で、宮崎市保健所からの報告であった。70 歳代で症状はなかった。

i) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

Invasive *Haemophilus influenzae* infection

2013 年 4 月から届出対象となった疾患で、県内で初めて報告された。宮崎市保健所からの報告で、患者は 70 歳代であった。主な症状として頭痛、発熱、意識障害、項部硬直等がみられた。

j) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal infection

報告数は 12 例で、宮崎市(11 例)、日南(1 例)保健所からの報告であった。性別では男性 5 例、女性 7 例で、年齢別では 70 歳以上が約 4 割を占めた。主な症状として発熱、咳、意識障害等がみられた。ワクチン接種歴は有りが 5 例、接種無しが 1 例、不明が 6 例であった。

k) 水痘(入院例) Chickenpox

2014 年 9 月から届出対象に追加された。報告数は 1 例で、臨床診断例であった。宮崎市保健所からの報告であった。年齢は 0 歳で、主な症状として発熱、発疹がみられた。ワクチン接種歴はなかった。

l) 梅毒 Syphilis

報告数は 12 例で、早期顕症 I 期 3 例、早期顕症 II 期 4 例、無症候性 5 例であった。宮崎市(6 例)及び日向(3 例)保健所からの報告が多かった。性別では男性 8 例、女性 4 例、年齢別では 20 歳代が全体の 3 割を占めた。推定感染経路は異性間性的接触 6 例、同性間性的接触 1 例、性的接触(不明)2 例、不明 3 例であった。主な症状として梅毒性バラ疹、硬性下疳等がみられた。

m) 播種性クリプトкокクス症

Disseminated cryptococcosis disease

2014 年 9 月から届出対象に追加された。報告数は 1 例で、宮崎市保健所からの報告であった。

70 歳代で、主な症状として発熱、意識障害、項部硬直がみられた。

n) 破傷風 Tetanus

報告数は 1 例で、都城保健所からの報告であった。50 歳代で、主な症状として筋肉のこわばり、開口障害、嚥下障害、発語障害等がみられた。

o) 風しん Rubella

報告数は 3 例で、病型は臨床診断例が 2 例、検査診断例が 1 例であった。宮崎市(2 例)、延岡(1 例)保健所からの報告で、性別では男性 1 例、女性 2 例、年齢別では 10 歳未満が 1 例、30 歳代が 2 例あった。ワクチン接種歴は 1 回有りが 1 例、接種無しが 1 例、不明が 1 例であった。

p) 麻しん Measles

報告数は 4 例で、病型は麻しん(検査診断例)が 3 例、修飾麻しん(検査診断例)1 例であった。延岡(2 例)、宮崎市(1 例)及び都城(1 例)保健所からの報告で、性別では男性 3 例、女性 1 例であった。年齢別では 10 歳代 2 例、20 歳代 2 例であった。ワクチン接種歴は 1 回有りが 2 例、接種無しが 1 例、不明が 1 例であった。

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は 63,670 人、定点当たりの報告数は 1,482.6 で、前年と同程度、過去 5 年間の平均値(以下、「例年」という。)の約 0.9 倍、全国の約 1.6 倍であった。

各疾患の発生状況の概要は表 3、経時的発生状況は図 1 のとおりで、その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2014/2015 年シーズンの報告総数は 26,416 人、定点当たりの報告数は 447.7 で、前シーズン及び例年の約 1.2 倍、全国の約 1.6 倍であった。流行の時期は例年よりやや早く、2014 年第 52 週(12 月下旬)に定点あたり 20.9 と流行注意報レベルを超過し、翌々週第 2 週(1 月上旬)には定点あたり 76.4 と流行警報レベル開始基準値を超過した。翌週第 3 週で定点あたり 99.6 と流行のピークを迎えた後、第 9 週(2 月下旬)に終息基準値を下回った。今シーズンの流行の中心となったウイルスは昨シーズンと同じ A 香港型(AH3)で、AH1pdm09

型及びB型による患者も確認された。延岡(557.4), 都城(478.2), 日南(464.8)保健所の順に報告が多く, 10歳未満が全体の53%を占めた。

b) R S ウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は 2,146 人, 定点当たりの報告数は 59.6 で, 前年の約 1.1 倍, 例年と同程度, 全国の約 1.9 倍であった。延岡(114.3), 日向(110.8), 日南(87.7)保健所からの報告が多く, 2歳未満が全体の約 79%を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は 1,719 人, 定点当たりの報告数は 47.8 で, 前年の約 0.7 倍, 例年の約 1.3 倍, 全国の約 1.9 倍であった。日南(126.0), 延岡(76.5), 中央(75.0)保健所からの報告が多く, 1歳から 4歳が 69%を占めた。

d) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は 3,424 人, 定点当たりの報告数は 95.1 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 0.9 倍, 全国と同程度であった。延岡(215.0), 日向(173.8), 高千穂(102.0)保健所からの報告が多く, 3歳から 6歳が全体の 60%を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は 19,364 人, 定点当たりの報告数は 537.9 で, 前年及び例年の約 0.9 倍, 全国の約 1.7 倍であった。小林(1105.3), 日南(870.7), 都城(547.7)保健所からの報告が多く, 1歳から 3歳が全体の 40%を占めた。

f) 水痘 Chickenpox

報告総数は 3,013 人, 定点当たりの報告数は 83.7 で, 前年の約 0.8 倍, 例年の約 0.6 倍, 全国の約 1.7 倍であった。延岡(149.8), 日南(99.0), 都城(97.2)保健所からの報告が多く, 1歳から 3歳が全体の 60%を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 3,218 人, 定点当たりの報告数は 89.4 で, 前年の約 0.8 倍, 例年の約 0.9 倍, 全国の約 3.4 倍であった。流行の時期は例年どおり夏期で, 第 26 週(6月下旬)の報告が最も多かった。日南(150.0), 小林(121.3), 延岡(99.5)保健所からの報告が多く, 1歳から 2歳が全体の 58%を占め

た。

h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は 89 人, 定点当たりの報告数は 2.5 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 0.1 倍, 全国の約 0.2 倍であった。日南(12.0)保健所からの報告が多く, 1歳から 3歳が全体の 42%を占めた。

i) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は 1,896 人, 定点当たりの報告数は 52.7 で, 前年と同程度, 例年の約 0.9 倍, 全国の約 1.9 倍であった。延岡(77.3), 小林(60.7)保健所からの報告が多く, 6ヶ月から 1歳が全体の 91%を占めた。

j) 百日咳 Pertussis

報告総数は 31 人, 定点当たりの報告数は 0.86 で, 前年の約 4.4 倍, 例年の約 0.3 倍, 全国の約 1.3 倍であった。日向(4.0)保健所からの報告が多く, 3歳未満が全体の 39%を占めた。

k) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は 1,999 人, 定点当たりの報告数は 55.5 で, 前年の約 1.5 倍, 例年の約 0.9 倍, 全国の約 1.3 倍であった。流行の時期は例年どおり夏期で, 第 27 週(7月上旬)の報告が最も多かった。延岡(141.3), 日向(81.3), 日南(69.7)保健所からの報告が多く, 6ヶ月から 3歳が全体の 85%を占めた。

1) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は 355 人, 定点当たりの報告数は 9.9 で, 前年の約 0.6 倍, 例年の約 0.1 倍, 全国の約 0.7 倍であった。延岡(23.5), 中央(15.0), 日向(14.8)保健所からの報告が多く, 3歳から 5歳が全体の 57%を占めた。

2) 眼科及び基幹定点報告疾患

眼科定点把握対象疾患の報告総数は 693 人, 定点当たりの報告数は 115.5 で, 前年の約 0.8 倍, 例年と同程度, 全国の約 3.8 倍であった。

基幹定点把握対象疾患の報告総数は 77 人, 定点当たりの報告数は 11.0 で, 前年の約 1.2 倍, 例年の約 1.1 倍, 全国の約 0.4 倍であった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は 3 人, 定点当たりの報告数は 0.5 で,

前年の約 1.5 倍, 例年の約 1.4 倍, 全国の約 0.8 倍であった。10 歳代と 50 歳代であった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は 690 人, 定点当たりの報告数は 115.0 で, 前年の約 0.8 倍, 例年と同程度, 全国の約 3.9 倍と多かった。10 歳未満が全体の 27%, 30 歳代が 20%を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 **Bacterial meningitis**

報告総数は 2 人, 定点当たりの報告数は 0.3 で, 前年の約 0.5 倍, 例年の約 0.4 倍, 全国の約 0.3 倍であった。0 歳と 30 歳代であった。原因菌は *Streptococcus agalactiae* が 1 人, 不明が 1 人であった。

d) 無菌性髄膜炎 **Aseptic meningitis**

報告総数は 18 人, 定点当たりの報告数は 2.6 で, 前年の約 0.5 倍, 例年の約 1.1 倍, 全国の約 1.4 倍であった。0 歳が全体の 56%を占めた。原因病原体は, *Respiratory syncytial virus* が 11 人, *Norovirus* が 3 人, 不明が 4 人であった。

e) マイコプラズマ肺炎

Mycoplasma pneumoniae

報告総数は 3 人, 定点当たりの報告数は 0.4 で, 前年の約 0.1 倍, 例年の約 0.1 倍, 全国の約 0.03 倍であった。10 歳未満 2 人, 50 歳代が 1 人であった。

f) クラミジア肺炎 **Chlamydial pneumonia**

報告総数は 1 人, 定点当たりの報告数は 0.1 で, 前年と同じ, 例年及び全国の約 0.2 倍であった。患者は 50 歳代であった。

g) 感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告総数は 53 人, 定点当たりの報告数は 7.6 で, 全国の約 0.9 倍あった(2013 年 42 週より報告対象に追加された。2013 年報告なし)。高鍋(34.0)保健所からの報告が多く, 1~4 歳が全体の 57%を占めた。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は 441 人, 定点当たりの報告数は 33.9 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 0.9 倍, 全国の約 0.7 倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は 270 人, 定点当たりの報告数は 38.6 で, 前年の約 0.7 倍, 例年の約 0.6 倍, 全国の約 0.9 倍であった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は 287 人, 定点当たりの報告数は 22.1 で, 前年の約 1.1 倍, 例年と同程度, 全国の約 0.9 倍であった。男女比は 1:1 で, 20 歳代から 30 歳代が全体の 66%を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpetic infection

報告総数は 33 人, 定点当たりの報告数は 2.5 で, 前年及び例年の約 0.5 倍, 全国の約 0.3 倍であった。男性が約 4 割, 女性が約 6 割で, 年齢別では 20 歳代から 30 歳代が全体の 64%を占めた。

c) 尖圭コンジローマ **Condyloma acuminatum**

報告総数は 19 人, 定点当たりの報告数は 1.5 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 0.6 倍, 全国の約 0.3 倍であった。男性が約 4 割, 女性が約 6 割で, 30 歳代が全体の 53%を占めた。

d) 淋菌感染症 **Gonorrhoea**

報告総数は 102 人, 定点当たりの報告数は 7.9 で, 前年の約 1.2 倍, 例年と同程度, 全国の約 0.8 倍であった。男性が約 9 割, 女性が約 1 割で, 20 歳代から 30 歳代が全体の 60%を占めた。

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* infection

報告総数は 252 人, 定点当たりの報告数は 36.0 で, 前年の約 0.7 倍, 例年の約 0.7 倍, 全国と同程度であった。70 歳以上が全体の 68%を占めた。

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* infection

報告総数は 16 人, 定点当たりの報告数は 2.3 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 0.2 倍, 全国の約 0.5 倍であった。10 歳未満が全体の 44%を占めた。

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant *Pseudomonas aeruginosa* infection

報告総数は 2 人, 定点当たりの報告数は 0.3 で, 前年の約 0.7 倍, 例年の約 0.3 倍, 全国の約 0.5

倍であった。いずれの患者も 70 歳以上であった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち、結核は県内全域から、0 歳から 99 歳まで幅広い年齢層で報告された。特に 70 歳以上の高齢者が全体の 55% を占め、例年通りの傾向であった。また、A 型肝炎は全国的な流行に伴い、県内でも全数把握対象に追加された 2003 年以降最も多い報告数であった。全国で 2014 年に遺伝子解析された 159 例のうち遺伝子型 I A 型が 137 例と最も多く²⁾、県内でも遺伝子型解析を行った 7 例についてはいずれも I A 型であった。また、全国の I A の内 75% は遺伝子解析を行った領域の配列がほぼ完全に同一で、発生時期が 2014 年 7 週～11 週に集中していることから、広域型の同一感染源が存在する可能性が示唆されている³⁾。県内の推定感染経路食品は、牡蠣、二枚貝、鳥刺し及び鹿肉の喫食が報告されたが、感染経路の確定には至っていない。A 型肝炎は潜伏期間が 2～7 週と長く、喫食状況等の疫学調査が困難なため、遺伝子解析が重要となる。引き続き積極的に検体確保に努める必要があると考えられた。

定点把握疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は、前年と同程度、例年の約 0.9 倍、全国の約 1.6 倍であった。特に、インフルエンザの定点当たりの報告数は前年の約 1.2 倍、例年の約 1.2 倍、全国の約 1.6 倍と多く、流行の年であった。

眼科定点把握対象疾患のうち、そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は、前年及び例年と比較してやや少ないか同程度で、全国の約 3.9 倍と多かった。本県は例年全国より報告数が多い傾向にあり、今後も動向に注意する必要があると考えられる。

基幹定点報告疾患は前年及び例年と比較してやや多く、全国と比較して少なかった。報告数が増

加した背景には、感染性胃腸炎（ロタウイルスが原因のものに限る）が 2013 年 42 週から追加になったためと考えられた。

月別報告対象疾患の性感染症の報告総数は前年と比較してやや多く、例年及び全国よりやや少なかった。性器クラミジア感染症、尖圭コンジローマ及び淋菌感染症は増加しており、情報提供を積極的に行うことで感染拡大防止に繋げることが重要である。

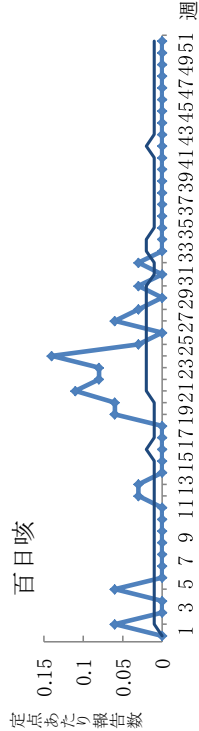
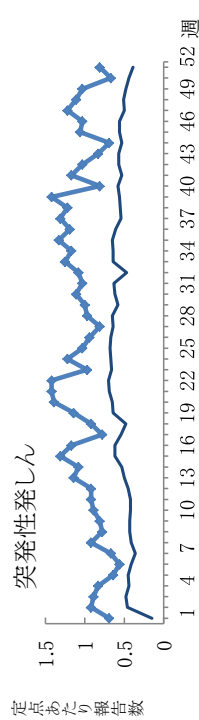
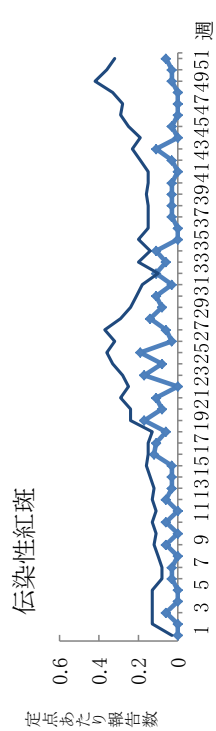
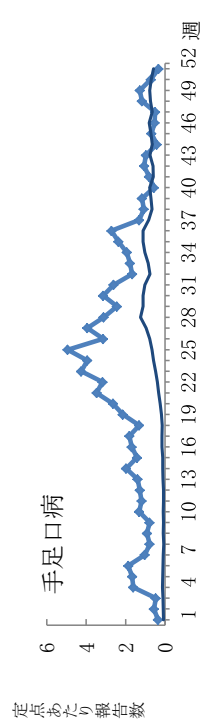
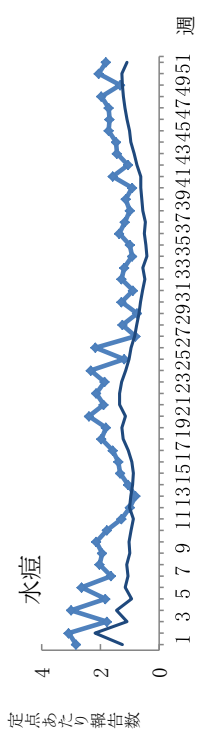
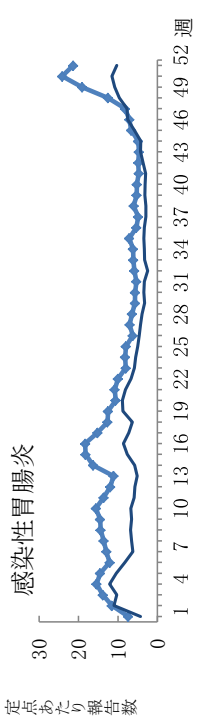
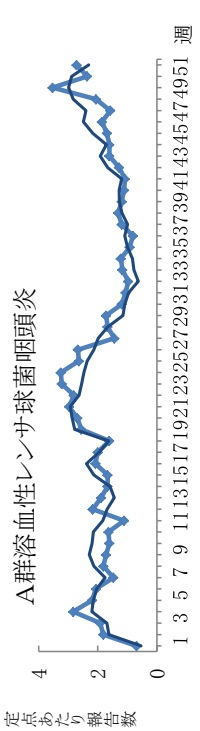
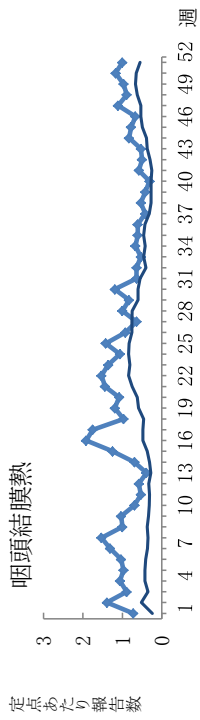
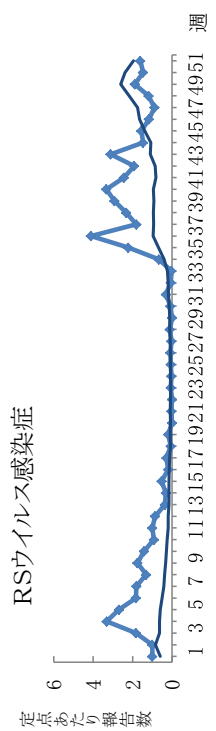
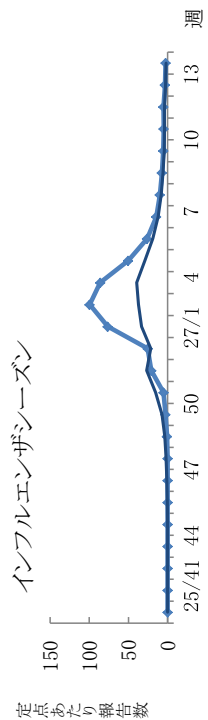
調査結果から、疾患によって流行発生時期や地域差、年齢差等があることが分かった。このことを受け、今後も引き続き、感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い、感染症の発生動向に細心の注意を払うとともに、若年齢層及び乳幼児を持つ保護者を中心に、適切な情報の提供と感染予防のための啓発を行っていく必要があると考えられる。

備考)

感染症発生動向調査事業は、患者情報と病原体情報から構成されており、当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

文献

- 1) 厚生省保健医療局長通知：感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について、平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号。
- 2) 国立感染症研究所：〈特集〉A 型肝炎 2010 年～2014 年 11 月現在、病原微生物検出情報 IASR2015 年 1 月, Vol.36 No.1(No.419), 1-2, 2014
- 3) 国立感染症研究所：〈特集関連情報〉2014 年の A 型肝炎流行状況について、病原微生物検出情報 IASR2015 年 1 月, Vol.36 No.1(No.419), 3-4, 2014



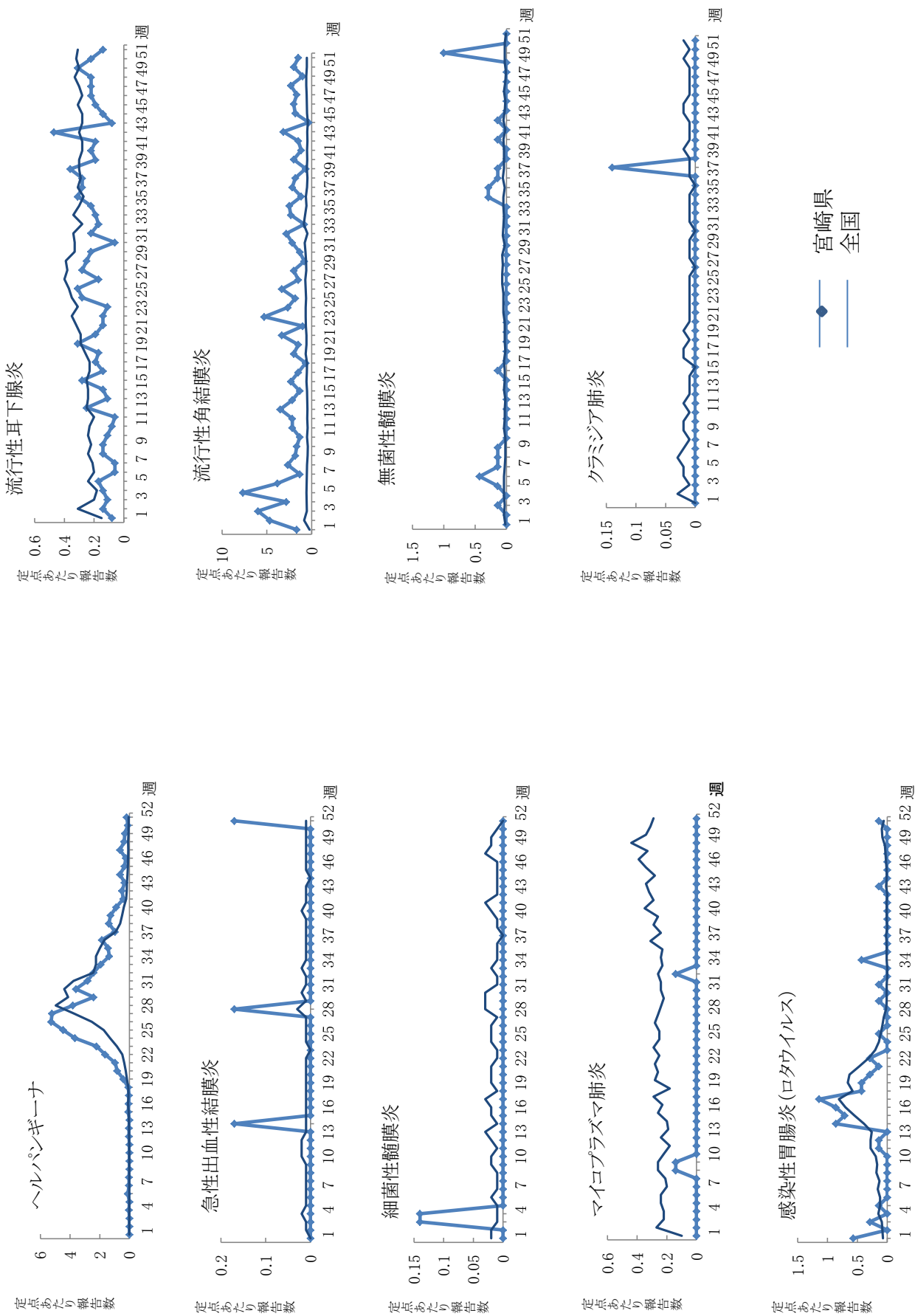


図1 定点把握対象疾患（週報告対象）の定点あたり報告数の週推移（経時発生状況）

表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要（宮崎県，2014年）

疾患名	年齢群別報告数の割合					報告総数	定点あたり 報告数	好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)	昨年比 (県内2013年) (%)	過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2014年) (%)
	報告総数	割合	割合	割合	割合							
インフルエンザ	26416	447.7	10歳未満	53	121	120	160					
RSウイルス感染症	2146	59.6	2歳未満	79	107	99	187					
咽頭結膜熱	1719	47.8	1歳～4歳	69	67	126	190					
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3424	95.1	3歳～6歳	60	106	88	98					
感染性胃腸炎	19864	537.9	1歳～3歳	40	93	93	168					
水痘	3013	83.7	1歳～3歳	60	76	63	167					
手足口病	3218	89.4	1歳～2歳	58	80	94	336					
伝染性紅斑	89	2.5	1歳～3歳	42	111	12	24					
突発性発しん	1896	52.7	6ヶ月～1歳	91	100	93	188					
百日咳	31	0.9	3歳未満	39	443	31	130					
ヘルパンギーナ	1999	55.5	6ヶ月～3歳	85	152	88	127					
流行性耳下腺炎	355	9.9	3歳～5歳	57	60	14	67					
急性出血性結膜炎	3	0.5	10歳代	67	150	150	82					
流行性角結膜炎	690	115.0	10歳未満	27	77	95	388					
			30歳代	20								
細菌性髄膜炎	2	0.3	0歳,30歳代	各50	50	45	34					
無菌性髄膜炎	18	2.6	0歳	56	55	106	136					
マイコプラズマ肺炎	3	0.4	10歳未満	67	12	7	3					
クラミジア肺炎	1	0.1	30歳代	100	100	16	21					
感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)	53	7.6	1歳～4歳	57	-	-	89					
性器クラミジア感染症	287	22.1	20歳代～30歳代	66	113	97	86					
性器ヘルペスウイルス感染症	33	2.5	20歳代～30歳代	64	49	45	29					
尖圭コンジローマ	19	1.5	30歳代	53	106	63	25					
淋菌感染症	102	7.8	20歳代～30歳代	60	124	102	78					
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	252	36.0	70歳以上	68	68	73	95					
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	16	2.3	10歳未満	44	107	20	48					
薬剤耐性緑膿菌感染症	2	0.3	70歳以上	100	67	30	52					